

まち会だより

'06

夏号

発行：特定非営利活動法人 調布まちづくりの会
〒182-0023 東京都調布市染地 3・1・19 八 3-510・TEL&FAX:0424-88-4022
e-mail : machikai@annie.ne.jp http://www.annie.ne.jp/machikai/

vol. 17

「まちのバリアフリー部会」第2回ワークショップ行なわれる

まちのバリアフリー部会では4月22日たづくり12階大会議場で、調布市協力、調布市社会福祉協議会及び調布市障害者（児）団体連合会後援により、第2回ワークショップ「みんなで話そう調布のバリアフリー」を開催しました。各部よりプレゼンテーションがあり、その後5グループに分かれてのワークショップが行なわれました。（2～3ページに関連記事）

「映画のまち 調布」第3回、第4回楽習会開催

当部会では、調布のまちづくりに産業として、文化としての映画がどう関われるのか、映画界の関係者を講師に迎えて、学習会（楽習会）から始めようと続けています。

第3回目は映画制作における最新技術、第4回目は映画プロデューサーの立場から大変興味あるお話を伺う事が出来ました。今後も皆さんと一緒に考え、意見交換の場としていきたいと思えます。

（3～4ページに関連記事）

「景観部会」カメラを持って実踏、意見交換

景観部会では、6月11日調布駅 布田駅、7月9日に西調布駅 調布駅の2回に亘り、午前中はカメラを持ち、各自の観点、視点から写真に収め、午後からは皆でそのスライドを見ながら意見交換、今後のまちの景観をどう考えるかの一步としました。（6～8ページに関連記事）

「おしゃべりサロン相互塾」7年目に入り大きく展開

76回の5月例会で参加者2000人の大台突破。「午後のティーサロン」は隔月開催に定着、「数学おあそびサロン」も調布市青少年交流館に、その上補習教室に関わるなど拡大発展しています。

8月は調布市の「平和の礎展」と共催、「市民が語る私の戦争体験」として、「辛酸をなめた旧満州からの引き揚げ」についてお二人の方から語ってもらいます。今後も調布市の市民の方から色々なお話を聞く会を開催しますのでご期待下さい。（9～11ページに関連記事）

まちのバリアフリー部会

第2回ワークショップ

みんなで話そう調布のバリアフリーを開催しました

4月22日、たづくり12階大会議場で調布市協力、調布市社会福祉協議会及び調布市障害者(児)団体連合会後援により第2回ワークショップみんなで話そう調布のバリアフリーを開催しました。総参加者数は50名、総合司会の進行にしたがい、開会の挨拶の後、当部会による「まちのバリアフリー部会の活動報告と提言について」と調布市福祉総務課による「調布市福祉のまちづくり条例概要説明・福祉3計画一部改定について」、更に調布市都市整備部街づくり推進課による「調布市交通バリアフリー基本構想策定状況について」各プレゼンテーションをしました。休憩を挟んで、A～Eの5グループに分かれてテーブルワークショップが始まりました。ワークショップの後は各グループの話し合いの結果について発表し、それぞれの結果について参加者によるフリートークがおこなわれました。

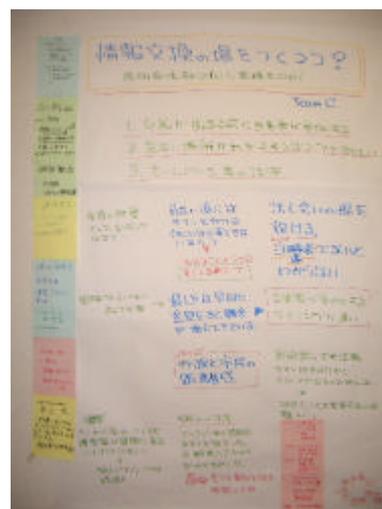
Aグループでは、「心のバリアフリー」を考える際に、障がいのある人や高齢者などの日常的な実情をまず「知る」ことが第一であり、次に「気づく」こと、更にある人が街で困っている場面や自らが利用する際に使いにくく困ることなどに「出会う」ことを体験して理解を深めることが大切であることから、「知る」「気づく」「出会う」をキーワードとして掲げて話し合いました。



Bグループでは、わかりやすいことから話し合いましたという事で、まずはハードのバリアフリーに関する意見では、様々な立場の人から実体験に基づいた具体的な意見が出されました。ソフト面ではこのような貴重な体験を広く知ってもらうためにこのようなワークショップの機会がもっと必要であるとか、施設を計画し建設する段階から利用者を交えて進めていくことが重要であることが話し合われました。



Cグループでは、「計画段階から当事者の参加が必要。」「道路などに於いて利用者に危険なポイントの情報が分かりやすい標識やマップが必要。」「タイムリーな情報を得られ、利用者からも書き込みができるようなホームページを活用。」といった多岐に渡っての意見や話し合いを通して双方向での情報交換が大切であるとの認識が参加者の中で一致し、「情報交換の場をつくろう！成功例も知りたい。苦情もOK」ということメッセージを掲げました。



Dグループでは、特にテーマを絞るということではなく、エスカレーター、エレベーター、だれでもトイレ、バス利用のこと、不法駐車など分かりやすい体験からでてくる気付きの話を展開させました。また、これら様々な課題も逆転の発想により解決できる可能性もあるのではという意見も出ました。



Eグループでは、大きくみつつのことを話合いました。ひとつめは心のバリアフリーではハードが当たり前に整備されることが前提になること。ふたつめは建物でも道路でも計画段階からの当事者の意見を聞きながら進めるべきであるということ。最後に立場や年代の違いを超えてこのワークショップのような場で話し合うことが重要であることが挙げられました。



今回のワークショップでは第1回目に引き続きたくさんの貴重なご意見を頂きありがとうございました。まちのバリアフリー部会はこのワークショップの成果を糧に、調布の街が少しでもだれもが住み良い街になることを願って活動を続けていきたいと思っています。これからもぜひ皆様のご参加やご意見をお願いいたします。なお、ワークショップの詳細や部会活動については、まちのバリアフリー部会のホームページをご覧ください。
<http://www.annie.ne.jp/machikai/machino/>

映画のまち調布

「映画のまち調布」部会

「映画」をキーワードとして、調布のまちづくりに市民がどう関われるか。これらを摸索する為に、初年度は映画関連の関係者を講師に迎え、学習会（楽習会）を新たに立ち上げました。一般市民の方も、構想段階から参加して頂き、一緒に考え、意見を交換する場として行きたいと思います。

第3回楽習会 2006.5.25

テーマ：「映画のまち調布」～映画制作における最新技術事情

講師：有限会社 マリンポスト 田中 貴志、舟橋 奨の両氏

第3回目は、調布市内にある映画関連企業のうち、映画タイトル、CG合成など先進的な技術について、最近携わった映画のメイキング映像を見ながら、大変興味深いお話を伺う事が出来ました。

マリンポストは、28年前東映ラボテックのマレーシアなど東南アジアのCMの編集を手懸け、1983年にはマレーシア、インドの90%のシェアを持っていた。1987年以降は日本映画のタイトル作成を始め、『竹取物語』（東宝作品）が最初。現在、当社の70-80%は映画の仕事。タイトルは本編より予告編に多く使われる。最近は歴史物の撮影場所が少ない為、絵で書いたものを動かしてCG化する。又日本映画は制作費が少ない為、CGによる事が多い。

CG合成技術を組み入れる映画には、三つの段階がある。

1. 準備：原作、脚本、撮影場所、画作り出来ない部分のCG化など準備段階から加わる。
2. 撮影：絵コンテを作りアングルを決める。最近では動画の絵コンテを作り俳優にイメージを持ってもらう。
3. 仕上げ：編集し、現場にないものをCGで作り、後から入れる。音入れも後からする。映画劇場ではフィルムに転換して映写する。

昨年公開の『春の雪』は明治時代のもの。汽車のセットで窓の向こう、奥の方はマット画を合成している。『男たちの大和』は空撮で現在の自衛隊のものを撮り、後で大和に置きかえる。撮影に制約のある一般道路のカーアクション等にはCGが使われる。

以上の通り、調布市内には多くの映画関連企業があるが、お互いに関係し合いながら育って行くものだという事が感じられた。

第4回楽習会 2006.7.26

テーマ「映画に命をかけた男の話」～一人のプロデューサーの人生

講師：シネマ・ディスト 代表 川嶋 博 氏

今回は東宝や松竹など100社余りある映画の企画、制作、配給する会社の中の小さな会社シネマ・ディストの代表でありプロデューサーである川嶋さんに、映画に向かう信念などを熱っぽく語って貰いました。

最近の映画事情

1959年に観客人口11億8千万人、即ち国民一人当たり月一回見ていた勘定になる。映画館も8千館でピークであった。所がこれからの映画人口は減少の一途を辿り、今から5~6年前の1998年には観客数で1億4千万人、館数で1800館に減少。約十分の一の規模になってしまった。

このような事情の中で、年間700本作られる作品の1~3本しか作らないシネマ・ディストという小さな会社を何故立ち上げたのか。それは私が思うような真っ当な企画が取上げられないような仕組みが映画界にあったからである。作品の力を分析し、何処に観客がいるのか、観客とどう気持ちが繋がるような映画を育て、制作をすることが出来るのか、そのためには自分で会社を作るしかないと言う事である。

その後、1998年をボトムとして映画界の考え方が変わってきた。今映画館と言うのはシネマコンプレックスのことで、1館に7~10スクリーンがある。3000スクリーンまで回復したが、過半数は大都市に偏在している。配給作品は外国のものを含めて余り変わらない。もう一つ言える事は、最近公開された「ダビンチコード」のように、日本全国840スクリーンに一齐にかけると言うことをする。作品の評価は別の話であるが、中小の作品が締め出されている事情は変わっていない。儲からない仕事を喜んでやっている会社である。

映画に命をかけた男 松木征二との出会い

私が映画界に入ったきっかけは、70年安保の時代、そこに高揚した空気があり、70年6月23日に大きなデモがあった。当時大学3年生であった私は、学校に行っても何をやって好いのか判らない。その時、当時前進座の友人Sさんを介して、日活の撮影所で「戦争と人間」の観客動員の応援をしてくれないかと誘われた事からである。そのうち、会社に関係なくやりたい事をやるには自分たちでやるしかないとなり、仲間と71年12月に会社を作る。それ以来何処の会社にも属さず、仲間達と様々な事を決め様々な事をやってきた。



1972年、大ヒットした「若者たち」3部作に関わり、そのプロデューサー松木征二に伴優座の人を介して会った。松木さんは「偲ぶ川」などを手がけた大プロデューサーで、私に「僕と一緒にプロジェクトを作ろう」と誘われ、1991年Mプロジェクトを作る。

その夏ごろ、佐賀の鳥栖の人からラジオ福岡にオンエアされた作品を持ちこんできた。この作品は非常に評判を呼んで、この話を鳥栖だけでなく全国に広めたい。脚本を書いた毛利恒之さんに相談した結果、松木さんの所に来たものである。シナリオが出来て私に回ってきた。このままやると3時間以上かかるので、これを縮めたのが「月光の夏」である。

半年ほどして、松木は「これが出来あがっても、俺は居ないかも知れない」と言う。ガンだと言うのである。それからは前のめりのように動き出した。松木は中代達矢さんをどうしても使いたかった。香港まで追いかけて承諾させ、流れを作ってから入院した。

92年11月25日完成。12月3日松木亡くなる。公開するまで6ヶ月間亡霊となって現れた。公開大成功をおさめてから消えた。松木は当たれば何でも良いという男ではなかった。絶対に妥協を許さなかった男であった。

< 中心市街地編 >

6月11日(日)、前日から降り続いた雨の中、デジカメを手に9人の名(迷)カメラマンが調布駅周辺布田1丁目～4丁目のまち歩きでした。午前中2時間、各人が区域の中を自在に歩き、気に入った風景、好きなスポット、気になる場所、残したい風景、歴史的遺跡、文化遺産などカメラに収めてきて、午後あくろすで「どのような観点で撮影したか」を写真をみながら発表することにしました。

区域は、京王線をはさんで北は甲州街道、南は品川通り、西は市役所前通りから東は布田駅の通りです。調布駅周辺は、京王線の地下化に伴う工事や南口再開発のビル工事が始まり今後10年間で大きくまちの景観と町並みが変わろうとしています。北側の区域では、地下化になった時の跡地を想像して現況を残す、調布の飲み屋、甲州街道をはじめとする道路、電信柱と電線が多く撮影され、南側ではまだまだ残っている生産緑地や畑、屋敷林など緑を中心とした景観を中心に8人8様の視点でまちが写しだされていました。総数230点は風景の中には、何人か重なるスポット、遺跡もありましたが、様々な景観の捉え方があるものだとみんなで、感心しきりでした。

嫌だなと思われたのが、電線、派手な看板、放置自転車、揃っていないスカイライン、残したいなというのが、お稲荷さん、屋敷林や畑、保存樹木、空の空間などです。駐車場が多くなった布田商店街の活性化が住宅街を変える、今は裏側になっている線路敷地並びの家並みをどうするか、空き地の住宅・集合住宅開発など、人の暮らしが変わると調布の景観や文化も変化してくることが予想されます。まちを歩くと放置自転車の迷惑や、自転車の歩道通行、ごみの散乱など市民のマナー向上も欠かせません。花の植え込みや緑の配置で歩く人を和ませてくれる風景も心に残りました。まちの景観をつくるのは、やはりそこに住んでいる人だとあらためて感じました。

個人ができること、行政ができること、事業者ができることの課題整理から、まちづくりや景観形成についても規制だけではない協働のしくみを考えていきたいものです。(安部宝根)



公共空地の活用の例



地下化工事が進む



南口たこ足公園と広場を眺める



南口広場の駐輪禁止看板前の
放置自転車



調布駅東口のカラフルな看板



マンション前の植栽が見る人を
和ませてくれる。



畑とマンション、屋敷林も見えて



道路脇のお稲荷さん



布田3丁目の屋敷林が緑のトンネルに



調布唯一の酪農家(布田3丁目)



布田3丁目の住宅



布田南通り南から踏切をみる



京王線地下化に伴って気になる景観
京王線路沿いの脇道と住宅(小島町2)



住宅の裏側(国領5丁目)



線路沿いにアパートが並ぶ(布田2丁目)



マンション前の通路にもなる空間



自動販売機と看板



調布駅北口電通大に向かって

< 西調布編 >

7月9日(日)心配された雨も降らず、西調布駅から主に下石原1丁目~3丁目、京王線をはさんで北は甲州街道、南は若宮八幡神社、西は西調布駅通~東は鶴川街道までを8人で撮影して回りました。西調布駅周辺の昔ながらの商店街や飲み屋は生活感に溢れています。歴史的遺跡のあるお寺、公会堂などが行き止まりの私道など細い路地に面しているのは昔の宿場町の名残でしょうか。さらに北に行くと中央高速のガード下やインターチェンジ、交通量の多い甲州街道や鶴川街道などがあり味気ない風景になります。

南側は、住宅街がひろがりスカイラインが広がるので威圧感もなくのどかな雰囲気でした。「いかだ道」と名づけられた旧道はそれほど昔の名残もなく少しがっかりです。住宅街には生産緑地が多く残っていて、今後の相続の発生とともに都市農業の行く末が心配です。人を寄せ付けない三面張りの府中用水沿いは、府中崖線の緑が貴重な景観でした。しかし、今後の開発による途切れた崖線やはけ下

の工場地帯と住宅の混在などが検討課題として出されました。住宅街の中に突然現われるミニ開発、人が自由に入れない公園、保存樹木であったケヤキの無残な伐採方法、農道の点在と京王線の7つの踏み切りなどもまちづくりの合意形成が必要になってきます。

報告会では、ブロック塀より生垣が都市の緑の創出になる、隣家に続いた生垣がグリーンベルトになる、屋敷林や八幡神社、崖線の緑の厚みは残しておきたいが開発が迫っているので危機感がある、湧水の復活、道路と私有地の住宅境界線についての再考、フェンスや生垣の高さにも工夫が必要、一人ひとりの市民の工夫や協力とそれを誘導する助成制度や表彰などの施策で景観を形成する必要があるなどの意見や提案が出されました。

歴史遺跡を活用して、まちの回遊性を考えるとこの地域も楽しいのではないのでしょうか。歩いて発見、みて発見、色々な発見がある中、景観形成への提案の必要性をそれぞれが感じた一日でした。(安部宝根)



西調布駅と商店街



西調布駅近くの喫茶店



生垣の高さに工夫がある生垣



土塀と石積みの中の生垣と境界



生垣の連続が緑を創出



農道（私有地？）の先の踏み切り



府中崖線上下の密集した住宅



三面張りの府中用水



府中崖線・凸凹山公園と看板



中央高速と派手な看板



府中崖線下のミニ開発住宅



品川通り沿いの花いっぱい運動

サロンネットワークの「相互塾」部会

おしゃべりサロン「相互塾」は第76回の5月例会にて延べ参加者が2000人の大台を超えました。これからもいろんな意味で拡大していくよう、展開していきます。

おしゃべりサロン「相互塾」も3月から、7年目に入りました。延べ参加者が2000人を超えるという、記念すべき時も過ぎました。また、4月例会から会場に「ご寄付の箱」を置かせていただき、皆様のご好意によって、相互塾関連の活動費（用紙、会場、資料、機材などの費用）に使わせていただくことにしました。そして、今年4月から、「午後のティーサロン」も隔月開催に踏み切りました。「数学おあそびサロン」も飛田給の調布市青少年交流館に定着し、さらに第6中学校と第8中学校の補習教室にも関わるようになったうえ、チームティーチングとして授業にも入ることになり、新しい展開に発展しています。

他団体との交流の成果として、「調布市民放送局」の設立に参加し、昨年8月に発足し、ケーブルテレビジョンのJ:COMを通じて、この4月より放送されています。この活動には、中央大学の松野先生のご指導をいただき、さらに多数の市民の方々から寄付として活動資金を頂戴しています。

第75回「相互塾」:「映画と小道具」南 孝二さん（高津装飾美術株式会社 代表取締役社長、調布FM放送株式会社 代表取締役社長）

4月24日、映画、テレビの小道具について、お話をいただいた。昭和9年に調布に来られた経緯など、その時代の特徴を知ることができて、興味深かった。小道具の他には大道具、衣装などによって映画、テレビは作られる。小道具にも、出道具（机、椅子など）持ち道具（鞆など）消えもの（食べるもの）があることも知ることができました。また、溝口監督、黒澤監督のエピソードもその本物志向は流石と思いました。参加者とのフリーな話し合いは、実に1時間半にわたりました。映画、テレビの小道具はほとんど、高津さんから提供されているようで、NHK大河ドラマは、高津さんに来ている話、TB



Sさんが少し持っておられる話、時代考証についても高津でできるように人の教育をしている話、今は映画よりテレビの方が多くなっていること、時代考証は時代ごとの専門家がおられること、多種多様であるから保管の管理のコンピュータ化が難しいことなどが話題になった。最後に映画の街調布の可能性について、話し合ったが角川さんが熱心になっておられるとのことで、期待しましょう。

第76回「相互塾」:「スポーツクラブと地域との交流」村林 裕さん（FC東京専務取締役）

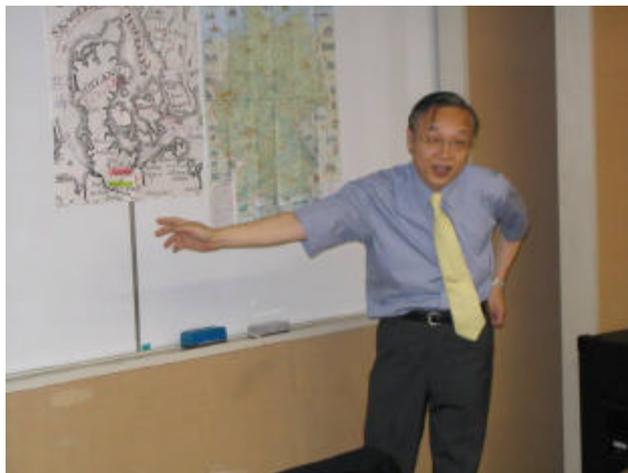
5月29日、FC東京の地域との交流について、現状と今後の考え方を、スクリーンに映像にて詳しくお話いただいた。資料は十分に調整されたもので、われわれ市民への姿勢はかなりなものと思いました。何故、FC調布でなくてFC東京となっているのかは、地域との交流は23区内にもあるからなのでしょう。FC東京では、マッチイベントを毎試合何かをやることにしているようで、また、協力商店会の日として協働でイベントを、そしてプレイーズシートを提供する選手もいるそうです。地域との取り組みとしては、商店街にフラッグを架けてもらっている、少年少女の観戦ツアーなどを行っている。調布との協働としては、知的障害者サッカー教室が5回目まで来ていて、にこにこサッカーと言っている。調布



ではサッカーは普及している。23区に行くとも中学ではサッカー一部はなくなる。調布でも女子はほとんど運動部に入っていない。教える人がいないので、基本ができていない。調布では、夜間照明も中学にはなかったもので、第3中学校にFC東京から寄付されたそうです。

第77回「相互塾」:「ドイツのまちの発展条件から調布のまちの発展を考える」 斯波照雄さん(中央大学商学部教授)

6月26日、ドイツの都市で発展したハンブルグと発展しなかったリューベックとの比較を基に、発展する都市に必要なことを歴史的考察して、調布の街の発展にどう向かっていけば良いかの観点で話され、大変参考になりました。ハンブルグはビールという産業があったため発展できた。リューベックは産業がなく発展が遅れ、最近は観光都市として発展してきているようです。外から来る人にやさしい街が発展するという。欧州の町は、植民として東欧に広がっていった。欧州では市民としての意識が高く、権利の主張だけでなく義務として街に貢献することを良しとする。日本においても、街の発展には市民意識が絶対条件で、「調布大好き」の人の集まりができることです。商店街の発展には、商店あるいは商店街としてそれぞれが特徴を伸ばし、その上、相互に助け合い、闘う意識を持って創意工夫することだとのこと。実現に向けては、リーダーが重要で、地権を持っている人がどれだけお金の負担ができるか。ビジョンの提案とそれに乗っていかん支援をするか。客の視点で考えることが必須です。



「数学おあそびサロン」:2004年1月にスタートし、現在は飛田給の調布市青少年交流館にて毎月第4日曜午前10時~12時に開いています。

「数学おあそびサロン」の会員(生徒)としては、事情があって、会員の募集は控えていますので、今は4人のままで増えていません。しかし、今年は、第6中学校と第8中学校への補習学習に協力できるようになったこと、ビデオ鑑賞による楽しい数学への展開などによって、活動の範囲は拡大しています。また、市の教育委員会の紹介で、如水会(一橋大同窓会)調布支部の世話役の方とも交流が始まり、コミュニティ・スクールへの発展が期待できるようになりました。皆さんの口コミにより会員(生徒)が生まれること願っています。

会場の青少年交流館の多目的室には、薄型の大型テレビが設置されており、ビデオを利用した学習もでき、幅の広い交流もできます。部屋のような、写真に示したとおりです。



青少年交流館多目的室

おあそびサロンの名に相応しいことも考えていきます。青少年交流館に近い調布の中学校にも交流したいと考えています。また、科学系の博物館の見学も検討していきます。

第6中学校と第8中学校の補習学習およびチームティーチングに協力することになりました。

第6中学校と第8中学校の補習学習に関わることができ、1月から毎週1回、放課後、数学の勉強を手助けすることになったのは、前号でお知らせしました。6中では「ステップアップ講習」に、8中では「質問タイム」教室に協力することになりました。教室に来てくれる生徒たちが、数学の基礎を身に付けてくれればと願っています。第6中学校ではすでに始まっていますが、第8中学校でも、9月からチームティーチングと言って、先生が行っている授業に入って、理解に戸惑っている生徒を見つけて、その生徒が理解できるように手助けすることがその役目です。コミュニティ・スクールへの可能性に期待しています。



廊下に貼られた授業風景:6中

また、第8中学校が調布の小学校などへ配る学校紹介のパンフレットの中に、放課後学習活動の実施の項目で、「質問タイム教室」の学習風景を写真入りで紹介していただきました。



質問タイム教室:8中

「午後のティーサロン」

「午後のティーサロン」は6月の第17回から5年目に入り、参加された方の延べ人数は385人となりました。5年目の今年からは隔月で開催することにしました。

第16回、4月9日「懐かしのスクリーン・ミュージック第3弾」

ヨーロッパ映画篇、アメリカ映画篇に続いて、3回目のスクリーン・ミュージックは、アカデミー主題歌受賞作をテーマとし、50年代からは「愛の泉」の『Three Coins in the Fountain』と「慕情」の『Love is a Meny-Sprendored Thing』、60年代は「明日に向かって撃て！」からパート・バカラックの『雨にぬれても』と「華麗なる賭け」からミッシェル・ルグランの『風のささやき』、そして、70年代からはバーブラ・ストライサンドが歌う「追憶」の『The Way We Were』と「スター誕生」の『Evergreen』と、スタンダード曲としていまに残る数々の名曲を、フランク・シナトラやバーブラの歌声と共にその名場面を楽しみました。

第17回、6月18日「チャップリ特集」

「たづくり」10F1002室でおこないました。たまたまこの時期にNHKでも「チャップリン」を取りあげ多角的な番組が組まれており、チャップリンファンにとっては懐かしくもあり、嬉しい貴重な内容の放送でした。

「午後のティーサロン」の「チャップリン特集」では数多くある作品の中から「ライムライト」「黄金狂時代」「独裁者」「モダンタイムス」の4作品を選びました。笑いの王様チャップリンにふさわしいコミカルなシーン、笑いとペーソス、そしてチャップリンがその作品にこめた彼の痛烈なメッセージ等の場面がうまく盛り込み、伝えられればと思っておりましたが、会場のみなさんがよく笑ってくれ、また退場の際にも「よかった」という言葉をいただきました。



新しいサロン創りへの試み

「調布まちかど博物館（エコミュージアム）」実現に向けて、新しいサロンを考えています。

景観部会の成果を活用し、エコミュージアムの発想で、調布のお宝を探り、意外なコレクションを見つけ、それらの連携をとり、Mapとしても表現できることを考えます。また、広場や雑木林なども創作者と地域の人たちとの自由な表現の場に展開していくことを進めます。広く人材を求め、行政も巻き込んで実現して行きたいと考えています。会員を始め、広く関心のある方の参加・協力をお願いします。

その後の「翔べ調布」の状況

2005年11月23日に行った市制50周年・戦後60年記念の市との共催事業「翔べ！調布」のワークショップでの成果から、新しい活動グループへの展開は月1度のミーティングを開いてきました。その中で、映画については、「映画の街調布」部会にメンバーが参加し、拡大して進めることになりました。検討を進めるテーマとして、学校開放を含めたコミュニティ・スクールの可能性、このことでは如水会調布支部への協力を検討します。今後のこの活動の展開について、近くメンバーで話し合います。

他団体との交流として、「相互塾」のメンバーが、「調布市民放送局」の活動に参加

昨年8月18日、「調布市民放送局」（代表は当会会員の森下政信）は、設立準備会から正式に発足した。中央大学の松野良一教授の指導を全面的に受けて活動しています。1月22日にケーブルテレビジョンJ:COMにて、パイロット放送番組を流すことができ、パイロット放送に対して、一般紙6紙が、地方版を中心に大きく報道していただいた。また、3月7日には、NHK総合テレビの首都圏ネットワークの中で紹介していただきました。4月16日の週には、本放送を無事始めることができました。毎月1週間、毎日15分の番組を制作し、放送を続けています。4月以降の放送番組は、
4月・調布市民放送局開局記念インタビュー 深大寺住職 ・外国人にはどう映る？「日本語で話そう会」
5月・調布のさくら物語 ・齊藤亀三さんとランの出会い
6月・「調布の大学訪問」～白百合女子大学～ ・「地域を守る 調布消防団の活動を追う」
7月・金備前 ・そば大好き・近藤勇 となっています。

インフォメーション

おしゃべりサロン相互塾

8 / 5 (土) 14:00~16:00 調布市文化会館たづくり12階大会議場

「市民が語る私の戦争体験」 語り手：池田精孝さん・河村利子さん

9 / 25 (月) 19:00~21:00 調布市総合福祉センター4階視聴覚室

「人生は出会いのドラマである」 語り手：中島 力さん(元テレビ朝日制作局長・作家)

10 / 30 (月) 19:00~21:00 調布市総合福祉センター4階視聴覚室

「子どものかかえる問題」 語り手：村上 剛明さん(調布市教育相談所主幹)

11 / 27 (月) 19:00~21:00 調布市総合福祉センター4階視聴覚室

「緑の循環から始まる生活環境」 語り手：内山 信一さん(遠州屋材木店社長)

まち会事務局会

8 / 7 (月) 19:00~21:00 調布市総合福祉センター2階ボランティア活動室

まち会定例会

8 / 9 (水) 19:00~21:00 調布市国領市民プラザあくろす2階市民活動支援センター

調布まちづくりの会はこんな会です。

1996年、「市民の手でまちづくりを」という思いから都市計画マスタープランづくりに参加するために集まった市民がワークショップやシンポジウム、まち歩きなどを行っては議論を積み重ね、1997年1月に市民と行政により調布まちづくりの会を発足させ、他に例がないほど進んだ市民参加と行政の協働により、1998年3月、調布市都市計画マスタープラン原案を作り上げました。

この原案の完成をもって会はひとつの役割を終えましたが、そこに掲げたまちづくりの理念である「住み続けたい緑につつまれるまち調布」の実現や合意形成、市民参加の推進を図るため、1998年10月に新生「調布まちづくりの会」を再発足し活動を継続してきました。さらに2000年3月に特定非営利活動法人の認証(東京都)を得、同年4月に特定非営利法人調布まちづくりの会を設立しました。

会の活動は、景観、統廃合跡校舎有効利用、多世代交流、バリアフリー、地域通貨など自主テーマや市が策定している計画などまちづくりに関するいくつかのテーマを選び、調査研究を行いながら市民への啓発、行政への施策提言、多方面への情報提供、交流などの活動を行っています。

また、2003年6月、当会の一連のまちづくり活動に対し第1回日本都市計画家協会賞佳作を受賞しました。



入会案内：いつでも、どなたでも入会できます。

年会費 正会員(個人) 2,000円

正会員(団体) 5,000円

賛助会員(個人) 1,000円

賛助会員(団体) 3,000円

郵便払込口座 調布まちづくりの会
00150-1-136749

編集後記

今号の編集はPCにからきし弱い宇根が担当しました。それぞれの分野の皆さんの活発な活動の記事で、写真など情報量も多く、一世代前のPCも悲鳴を上げる始末。悪戦苦闘しましたが、Oさんの協力を得て何とか発行にこぎつけることが出来ました。都市マスの見直しも始まり、当会の役割も増大しています。興味ある方のご参加をお待ちしています。 2006.8 宇根